

羊狙われ たわ

Nakamura Atsuo

中村敦夫



狙われた羊

中村敦夫

文藝春秋

中村敦夫 (なかむら・あつお)

1940年東京生まれ。東京外国語大学マレー・オランダ語学科中退。俳優座養成所卒。72年、『木枯し紋次郎』で脚光を浴びる。その後もテレビ、映画で活動。監督、演出、脚本をてがけた作品も数多い。小説家としては、83年、国際情報小説『チェンマイの首』を発表。ほかに『ジャカルタの目』『マニラの鼻』『結婚しましょ!』などの著書がある。

ねら
狙われた羊 ひつじ

一九九四年十一月十五日第一刷

著者 中村敦夫

発行者 阿部達児

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三—二三
電話〇三—三二六五—一二一一

印刷所 理想社

付物印刷 大日本印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁乱丁があれば送料当社負担でお取替えいたします。小社営業部宛お送りください。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-16-315210-5 ©Atsuo Nakamura 1994
Printed in Japan

にせ預言者を警戒せよ。

彼らは、羊の衣を着てあなた方の所に來るが、その内側は強欲な狼である。

オブジェ
デザイン
北見
関口聖司
隆

狙
わ
れ
た
羊

主な登場人物

救出側

牛島三郎 私立探偵

坂巻よね その秘書

木下理恵 スナック「ヘンタリー」のママ

北原牧師 ベツレヘム教会の牧師

藤田 救出ボランティア

国際キリスト敬霊協会

朴 明烈 メシヤ・聖なるお父様

李 英信 聖人

上岡達雄 日本本部会長

長峰国彦 同・準幹部、シニア・リーダー

大隅良江 同・準幹部、ママ・リーダー

阿川礼子 同・霊能師

大河原 同・占い師

古川鉄二 多幸物産・代表

穴戸信行 ほほえみ商会

信者

松本武志 シープ

尾崎加代 同

中道葉子 同

小川早苗 シスター

被害家族

松本安吉 武志の父

時枝 同・母

プロローグ

まるで**糞虫**^{みのむし}の宙返りだ。

寝袋に包まれた尾崎加代の体は、足元の方から浮き上がり、闇の中で半回転した。

まだ眠れずにいたのに、声をあげる間もなかった。何が起きたかを理解する前に、背中が鉄板に打ちつけられ、テニスボールみたいに全身がはじかれた。誰かの寝袋の上に墜落するのと、もう一つの寝袋が顔面に落ちてくるのがほぼ同時だった。鼻柱がめりこむような激痛を感じたと思ったら、体はふたたび宙に投げ出された。ものがぶつかり合う気配と断続的な短い悲鳴、そして最後に、破滅的な激突のショックが加代を襲った。

ザーッと音がして粉々になったガラスの粒が降ってくる。その音を聞きながら意識が次第に遠のいていった。

……どれほど時間が経ったのだろう。

鼓膜を揺さぶる不快な雑音と、胸にのしかかる重苦しさで闘いながら、加代は徐々に自分を取り戻した。身じろぎもせず耳を澄ましていると、雑音の正体が分かった。車のエンジンと空回り

するタイヤの軋み^きだった。どうやら自分は、転落した車の中に閉じ込められているらしい。車体の向きがどうなっているのか見当がつかないが、正常な状態でないことは確かだった。

体の上にとっしりと何かが乗っかっている。胸の苦しさはそのせいだった。寝袋の内側からチャックを外そうともがいたが、覆いかぶさった物体の重量で手が自由にならない。

加代はその物体を確認しようと、やっとの思いで首をねじ曲げた。ガラスを失った車の窓から、弱い月光が射し込み、部分的に内部を照らしていた。目と鼻の先に異様なものがある。男の首だ。見開いた両眼が、ガラス玉みたいに光っていた。

「ヒィー」

声にならぬ叫びを上げた加代は、全力で体をくねらせ、のしかかっていた相手を押し退けた。

あわててチャックを引き下ろし、自由になった上半身を起こした。背中に激痛が走った。

どこかで呻き^{うめ}声^{こゑ}がした。

「誰っ」

加代が反射的に叫んだ。

呻き声は断続的に続いたが、言葉は返ってこなかった。誰だろう？ 奇妙なことだが、一緒に乗っていた者の名前がどうしても思いだせない。頭をぶつけたからだろうか……。不安になった加代は、押し退けた寝袋の方を振り返った。

後頭部が見えた。微動だにしない。髪に黒い液状のものがべったりと張りついている。血のように見える。いや、血だ。すでに霊化（死亡）しているのかも……。加代の背筋に冷たい電撃が突き抜けた。

鼻柱のあたりがズキズキと痛み、上唇から顎にかけて生温かいものが流れている。手の甲でぬぐうと真っ赤に染まった。鼻血だった。

加代は障害物を押し分け、歪んだ車窓から這いだした。両手にひんやりとした感触……土が濡れている。すぐそばに小川が流れていた。

加代は、四ん這いになったまま後を振り向いた。

白いハイエース・ロングが、大外刈りを食らった柔道選手のように、夜空に向かって腹を見せていた。車のフロント部分を浅瀬に突っこみ、車体が逆立ちしていた。周囲には、ナップザックや味付きの根昆布が入ったビニール袋が散乱している。碎け散った窓ガラスの破片が、黒い土の上でキラキラと光っていた。

ヤッケを着ていても、身震いするような寒さだ。加代は車の上方を見上げた。

小さな橋があり、低い木製の欄干の一部が壊れていた。

あそこから落ちたんだ……加代はぼんやりとそう思った。運転していたのは班長だ。

班長はどうしたのだろう？

加代はよろよろと立ち上がった。痛む背中をかばおうと身を縮めた時、せせらぎの中に不思議なものを見つけた。加代は目を凝らした。

水の中にいるのは人間だった。車体の下から仰向けの上半身だけが飛びだしている。男だ。頭髮が、流れに沿って逆立ち、ゆらゆらと揺れている。白目をむきだし、口は開いたままだ。

加代の唇がワナワナと震え出した。水の中にいるのは、班長だった。

金縛りにあったように、体中の筋肉が硬直した。悲鳴をあげようにも声が出ない。逃げだしたかった。必死で一步一步後退りした。

背後で物音がした。ハッと振り向いた。

数メートル離れた所に誰かがいた。逆光になっていたので特定できない。ずんぐりした人影は加代に気づかず、のろのろと動いている。周囲に散ったビニール袋を拾い集めているようすだ。

「松本さん……？」

加代がおずおずと尋ねた。

人影は動きを止め、こちらを見た。

「松本さんでしょ」

返事がないので、加代の方から近づいた。ボサボサ頭にニキビ面……やはり松本武志だった。

「あなた怪我なかったの」

「ああ」

紺色のヤッケを着た松本は、ふぬけのように答えた。目がとろんとしていた。墜落のショックから立ち直っていないようだった。

「班長は霊化したみたい」

「知ってるよ」

感情のない声だった。しばらく二人の間を沈黙が支配した。

やがて加代が言った。

「どうしよう」

「さあ……」

相手が頼りないので、加代はしつかりしなくてはと思った。

だが、いくら考えても判断する術すべがない。そのうち、あることに気づき、ハッと自分を取り戻した。そうだ、普段から教えこまれたマニュアルに従えばいいのだ。加代の蒼白い顔に生氣が戻ってきた。

このケースは、どうすべきか。

「分かった、逃げましょう」

「逃げる？」

「交通事故があつたら、少くとも二人はすぐ逃げろと言われていたでしょ。七人乗りは違反だからって。これ交通事故でしょう？」

「そうか……そうだった」

松本の頬に赤みがさし、目が少しずつ輝きを増した。

「それから報連相よ」

「そうだ、それだ」

報連相とは彼らの標語だった。何が起きても上司や本部へ、〈報告〉〈連絡〉〈相談〉せよという鉄則を意味した。

日常繰り返される指導では、何ごとにも個人で決断することは禁じられていた。

二人は、転落したハイエースに近づいた。窓から上半身を突っ込み、自分たちの私物を見つけたそうと手探りした。

車の中のどこかで、相変わらず呻き声がしていた。

介抱したいと加代は思ったが、実際には何をどうすべきか思いつかない。それよりも、できるだけ早く本部へ連絡しなければならぬという使命感にせきたてられていた。

混乱した車中から、二人はやっと目当てのリュックサックを引きずりだした。

加代は、紺色のリュックのポケットから懐中電灯を取り出し、ヤッケの袖をめくって腕時計に光を当てた。文字盤のプラスチック・カバーが外れ、片方の針が飛んでいた。加代は、松本武志の手元に懐中電灯を向けた。

「今、何時」

「二時二十五分」

「ここどこか分かる」

「いや」

「分かるはずないわね」

群馬県のとこかであることは確かだった。しかし、走る車の中で何時間も横たわっていたので、方角さえ見当がつかなかった。

「とにかく行きましょう」

リュックを背負うと、二人は堤防の斜面をよじ登った。

寒風が吹き荒^{すさ}んでいた。耳が切れるかと思うほど冷たい。加代は、ヤッケのフードでおかっぱ頭を包んだ。川をはさんだ二つの堤防の両側には、果てしない田畑が広がっていた。川下のはるか彼方に、かすかな灯りの気配があった。堤防の上の車道を辿れば、人里まで行き着けるかもしれない。

加代は、ヤッケのポケットの中でテレフォンカードを握りしめた。現金はなかったが、本部と連絡できる命綱だった。

橋の下では、依然ハイエースのタイヤが空転していた。再び、戻って仲間を助け出したい衝動に駆られた。しかしすぐに「報連相」という文字が加代の感情を否定した。

迷いが続くことを恐れ、一気に走りだす。あわてて松本が追いかけてきた。

気温は零下を記録しているに達しない。吐く息がそのまま凍ってしまいそうだった。背中痛みはどんどんひどくなる。歯を食いしばって走った。試練だ、と加代は思った。自分が苦しめば苦しむほど、神は救われるのだ。

「ウォー！ ウォー！」

背後で、松本が雄叫びをあげている。

研修会で習った〈感情の解放〉をやっているのだ。怖じけづいた時、不安な時、自信のない時、恥ずかしさを捨てるとき、大声でわめくとすっきりし、度胸が据わる。組織に入ったばかりの時は、新宿や渋谷の人込みの中でやらされたものだ。

風が目当たり、涙が溜まった。その涙の向こうで、チラチラと灯りが揺れている。加代には、それが天国の光のように見えた。天国に近づくには、あと何キロ進まねばならないのか。

加代は、背中の痛みを忘れるために、〈メシヤの御言葉集〉の一節を思いだそうと努力した。

可愛い私の小羊たちよ。

おまえたちの小さな苦しみが、

積もりつもって黄金の塊を創るのだ。

力を尽くし、共に頑張ろう。

耐えられないほど苦しくなった時、

私はおまえを抱き上げてあげよう。

そして、おまえの立派な心を褒めたたえてあげよう。

加代の頬に熱い涙がこぼれ落ちた。

「聖なるお父様、どうぞわたしをお救いください！　どうぞ、電話のある所までお導きください！」

加代は心の中で祈り続けた。

長峰国彦にとっては、厄介な一日の始まりだった。

マイクロ部隊十班分の当日売り上げや収支報告書を仕上げ、やっと寝床へもぐり込んだ途端、夜番の学生にたたき起こされた。

群馬県を回っていた第二班のハイエースが、交通事故を起こしたという報告だった。しかも死亡者が出たらしい。

「今、何時だ」

「午前三時ですが」

瞬きもせずに長峰を見つめていた学生が即座に答えた。

「で、連絡者は？」

「尾崎加代と松本武志です。指示を待つように言いました。十五分後にまた電話が入ります」

「今、下に降りる」

「はい」

長峰は、幹部用として三階の一部屋を与えられていた。とはいっても、六畳一間に小さなキッチンとトイレがついているだけである。

建物全体は、賃貸用に建てられた安普請のマンションだった。三階建ての十五部屋すべてを、組織がまるごと借り切っていた。そのうちの六部屋を、事務所、応接間、倉庫、幹部用などに使い、残りの九部屋は青年部の宿舎に当てられていた。一部屋に六、七人の若者が寝起きしている。長峰国彦は、貴重品収納用に使っているダンボール箱から、近眼鏡を取り出した。丸みのある

メタル・フレームは、角張った長峰の容貌を、多少やわらかく中和した。

布団を片づけ、部屋の隅にたたんでおいた紺色のヤッケを、寝間着代りのスエット・シャツの上から羽織った。

部屋の空気は冷えきっていた。経費節減で暖房装置のマスターは切られている。足の裏に触れる畳は、氷のように冷たかった。

長峰は、両手をヤッケのポケットに突っこみ、しばらく部屋の中央に立っていた。六十ワットの裸電球が、額のすぐ上でぼんやりとした光芒を放っている。天井は、百八十センチの長峰が手を上げれば届くほど低い。

これからやらなければならぬことを、頭の中で整理した。うろたえた姿など、間違っても目下の者たちに見せてはならない。

長峰は、この支部の幹部階級、ブラザーやシスターたちの長で、ヘシニア・リーダーと呼ばれていた。ランクではさらに上位の支部長もいるが、名誉職みたいなもので、実務を仕切っているのは長峰だった。

事件にまつわる一つ一つの要素を点検してゆくと、最初に感じたよりも、ずっと状況が深刻であることが分かった。

組織は、重大な危機に直面している。悪霊が、大きな災いを投げかけてきたのだ。長峰は、自分が抜き差しならぬ試験の場に立たされていることを自覚した。心と体が急に緊張し、頬がひきつってゆくような気がした。

事態を打開するために、一手たりとも段取りを間違うことは許されない。

「聖なるお父様、どうぞ私をお助けください。私に力を与えてください」

長峰は目を閉じ、声を出して祈った。こんなに真剣な気持ちになったのは、久しぶりだった。

心臓の周辺が急に熱くなり、気分が高揚した。長峰はゴム製のつかかけに素足を通すと、ドアを勢いよく押し開いた。廊下の突き当たりまで走り、階段を駆け下り、一階の事務所に飛び込んだ。二人の人間が振り返った。一人は電話番号をしていたさきほどの学生、もう一人は三十歳前後の女性だった。その女性はバジャマの上からベージュのレインコートを羽織っている。

「ママ・リーダー」の大隅良江だった。この支部の現場では、長峰に次ぐナンバー2の幹部だった。後頭部で束ねた髪をゴム輪で縛っている。化粧は禁じられているので、緊張した細面の顔はなおさら蒼白く見えた。黒目がちの瞳が、長峰の指示を待っていた。

「何本か電話しなくてはならない。大隅さん、分担してください」

「はい！」

大隅良江がはじけるように答えた。

まず本部の会長である上岡達雄に連絡しなくてはならない。上岡は情熱的な布教者であるが、あまり事務能力がない。危機管理のできるタイプではないので工夫がいる。

「会長の秘書に連絡してください。あまり大袈裟なことだと思わせないように。事実だけ言って、後はこっちで処理するからって。それから広報部長の耳にも一言入れておいた方がよい」

大隅に指示を与えた後、長峰は別の電話をとり、ダイヤルを回した。相手は、組織の三大幹部の一人、古川鉄二だった。古川は〈多幸物産〉の代表で、組織の経済部門を取り仕切っている。並外れたアイデアマンで、組織がここまで拡大できたのも、古川の戦略戦術によるものといつて過言ではない。長峰にとっては国立大学の先輩でもあり、最も信頼できる人物だった。

「何だい、今頃……」

古川の声は不機嫌そうだった。

長峰は事情を話し、自分の対策について機関銃のような早さでまくしたてた。しばらく、相手